

鹿児島県立自然博物館構想（私案）

—新館への夢—

福田 晴 夫*

A tentative plan on the future Kagoshima Prefectural Museum of
Natural History

Haruo Fukuda

鹿児島県立博物館の歴史は古く、今年で39年目を迎える。設立の契機は大正3年の桜島大噴火で、その資料保存のため翌4年に県立図書館内に郷土博物室が設置されていたが、昭和28年現在の考古資料館の建物に独立の県立博物館としてスタートした。その後、昭和56年1月、旧県立図書館を改装、移転して早くも12年目に入った。収集、展示の内容は、発足当時から自然関係の標本が主であったらしいが、少数の歴史資料などは新装なった黎明館に移す一方、現在館への移転時に文化センター科学館から受け継いだ理工系、天文・化石系が加わって、旧館の建物に考古資料館を併設しながらも、自然科学系博物館としての性格が強くなった。その後平成3年度に、鹿児島市科学館との機能分担なども考慮して、理工部門は産業科学・生命科学の展示場に変わり、現在は広い意味では考古分野を含む自然史博物館と呼んでもさしつかえない内容である。

しかし、本館の建物は昭和2年の建造物でその耐用年数もやがて問題となるし、そこまで至らなくても、生涯学習時代を迎え、環境問題、自然と人とのかかわり合いなどが人類の大きな問題になってきたことなどの事情で、そう遠くない時代に新館問題は避けて通れないものとなるであろう。

もちろんこれは、その時点で然るべき組織が出来て、本格的な計画が検討されるべきものであって、実際に県の企画として動き出すときは、それなりの手続きや書式が必要なことはいうまでもない。それにしても現在館のオープン直後から11年間ここで仕事をした者として、内部の人間からみた新館への理想像を描き出してみることは決して無駄なことではないと思う。むしろ、これなくしては現在館の運営も行きあたりばったりになる恐れがあり、さればこそ、私たちは現在館を幼生期型博物館と位置づけて、この理想像に近づくよう努力しているところである。

とはいっても、正直なところ、この理想像ほどつかみにくいものはない。たんなる空想、夢物語ならいざ知らず、それはあまり遠からず実現可能なものでなければならぬし、難しいことだが100年先を見通したものでなければいけない。そして、真に鹿児島県にふさわしく、オーソドックスでかつユニークなものでありたい。私自身の考えも、この一次試案、いや私案は、さらに思案を重ねて変化していくものと思うが、何か形にしておかないと前進はないのでここに思い切って書き留めておくことにした。

この夢の新館はとりあえず「自然博物館」なる名称を与えておく。もちろん、鹿児島県立というのが大前提で、本稿で博物館の一般論を述べるつもりはない。ただ、自然を素材にした博物館につ

* 〒892：鹿児島市城山町1-1 鹿児島県立博物館

いて、これから考えてみようとする人たちへの老婆心的な配慮から、多少くどいくらいに基本的な博物館論にふれることはお許しいただきたい。いずれ、新館建設に向けて県民へのアピールも必要になろうが、その前にじっくり各層の意見を交換し合い、よりよい理想像を作り上げておくのは楽しい作業である。プランが具体的な魅力的なものであれば、実現への何よりのステップになるであろう。拙稿がそのための何からかのお役に立てば幸いである。

本稿を草するに当たっては、これまで県内外の多くの方々と博物館論を重ねてきたことが一番のより所になった。あらためて心よりお礼申し上げます。ただし、拙稿の内容はすべて私の個人的な責任範囲にある。

1 県立自然博物館の必要性

自然博物館が他の県立の施設との関連で、どの程度の重要性と緊急性があるか、多くのデータをもとにかなりの言葉でそれを述べる必要がある。人と自然との関わり方が問い直される時代の中で、科学の進歩と人の生活の問題、鹿児島という地域の世界の中でのあり方の問題、そこに住む人とやって来る人の問題等々、いずれも避けて通れないものばかりである。しかし、ここではそういったいわば基本的な問題にはあえて触れず、一見枝葉と思われるような事項をまとめておきたい。

本県には世界に誇り得る自然がある——優れた素材がなければ良い博物館は出来ない。歴史部門で黎明館が存在するのはその例であるが、これに引き替え、本県の人たちがその生活のよりどころにしてきた自然環境は、あまりに恵まれすぎていたためか、あるいはその特色を知らしめる教育が不十分であったためか、自然についての一般の認識はまだ決して高くないように見受けられる。よく「豊かな自然」といわれるが、これは単なるうたい文句でなく、まさに言葉通りで、その実態は一般に考えられている以上のものなのである。

本県の自然の特色は、何と云っても、生物地理学上、旧北区と東洋区の二つの世界にまたがる日本では唯一の県であること、すなわちトカラ列島にある生物たちの国境線「渡瀬ライン」を境に、その動植物の顔ぶれががらりと様相を一変することである。しかも、その北方は宝庫屋久島が、南方には沖縄とともに東洋のガラパゴスといわれる奄美諸島がある。また、火山活動を中心とした特色ある地学的自然、黒潮の恵みによる珊瑚礁がつくり出す世界、さらに夏の季節風や台風がもたらす東南アジアからのおびただしい侵入生物群によるダイナミックな自然部分、これらは掛け値なしに世界に誇り得る本県の貴重な財産である。この素材を生かしてローカル色豊かで、かつ国際的にも通用する博物館づくりは本県に住むものの責務ともいえる。わが国の博物館先進県の人たちが、素材としては屋久島ひとつにもかなわないと、うらやましがらる話を紹介しておきたい。

本県の自然は基盤産業を支えている——本県の基盤産業である農林水産業、鉱業、そして観光も、優れた自然環境があればこそで、県民の生活がこれほど自然と深く関わっているところは国内では他にない。とくに農水産業面では、バイオテクノロジーの進展する時代、その遺伝子プールとしての生物群についての種保存、それらに関する基礎的な資料や情報がますます重要になってくる。従って、これらの試験研究機関との連携を密にした新しいタイプの博物館は極めて存在価値が高いはずである。

火山を知り、火山と生き、火山を活かす——鹿児島が火山県であることは既に昭和63年に国際

火山会議が開かれ、国際火山総合センターの設立が県の総合基本計画で戦略プロジェクトのひとつになっていることから明かである。そうであれば、資料や情報を収集し提示する場としての博物館はそれらの関連施設としてどうしても必要なものとなろう。

宇宙県鹿児島としての星空のアピール——種子島と内之浦にある二つのロケット基地、美しい星空の見える澄んだ大気、県内各地に設置されている天文台やプラネタリウム、多くの天文ファンの存在など、本県は宇宙への知識と夢を求める素地が醸成されつつある。これらの中核としての施設も博物館の一部として望ましい。顕微鏡による微少な世界から天体望遠鏡で望む宇宙の彼方まで、幅の広い自然を対象にした楽しい施設づくりが鹿児島なら可能である。

大学との自然研究についての緊密なつながり——鹿児島大学には、地元の自然資料を必要とする学部が多く、県内には他の国立大学の研究所も少なくない。また、私立大学にもそのような講座がかなりある。もちろん、大学には大学博物館の設置が必要とされるが、その実現の可能性は厳しいという。そうであれば、研究はもとより、とくに自然資料、標本の収蔵等について共用的な施設としての機能を持ち得る博物館を作ればよい。これは地方博物館の新しいモデルとなるであろう。

自然は急速に変化している——博物館の使命は資料の収集と活用にあるが、その資料は二つに分けられる。ひとつは、歴史民族資料館や美術館が対象とする自然の素材から生産したもので、日用品から芸術品までいろいろあり、古いものは失われ、新しいものは急速に増加し続けていて、後者についてどれを選択して残すかが課題である。もうひとつが、自然博物館が対象とする自然そのもので、ここでも原始的な自然のように人の手によって減少を続けるものと、人により作り替えられた飼育・栽培生物のように古い品種からより新しいものへ変わりながら増加しているものがある。これらはいずれも早急に保護、収集、保管の手を打つべきものである。

自然と人との関わりを模索する時代——環境問題が重視される時代を迎え、人々の目は自然に向けられているが、自然とは何かという論議は必ずしも十分でなく、また極めて多様である。このような中で、自然を理解するために、整理された自然情報を提供する博物館施設はますます重要なものとなろう。

2 自然博物館の活動内容

(1) 資料収集活動

自然に関する資料とは何か——自然は身近なものから宇宙の彼方まで広大なもので、これらの中には収集して保存することの出来ないものや、その必要のないものが多いし、ものでなく情報だけを収集すれば良いものもある。さらに、博物館として活用できるものや情報はさらに限定される。これは当然なことであるが、ややもすると忘れられることがある。このことをふまえて、博物館では資料を1次資料と2次資料に分けている。前者は実物または現象に関する資料、後者はそれに関する文献、調査資料である。

何をどれだけ集めるか——雑草や害虫のようにいくらとっても減らずに困るような種は、何もわざわざ標本にしてとっておかなくてもよい。必要ならその時いくらでも採れるからという意見がある。これは自然が時間と共に変化するものであることを忘れており、しかも近年、その変化が人によって著しく急速であることにも気付いていないことによる。これらの普通種はもっと

も人間生活に密着した生物群で、ある意味では珍奇種以上に大事な資料である。このことは一見変化しないように見える地学資料についても同様で、すでに鹿児島大学名誉教授の大庭昇博士(1989)が喝破されている通り、生物に比べてその変化が遅いだけである。気象や天文についても同じであろう。

何年か前、問題になっていた水銀汚染の研究材料として、鹿児島湾で50年前に採れた魚の標本はないかと来館した研究者があった。残念ながらお役にたてず悔しい思いをしたものである。

とはいっても、普通種をどのように収集するか、具体的な長期計画が必要である。例えば、ススキヤズメの標本は、県内を数地区に分けておき、各ブロックから少数の標本を5～10年おきに収集するなどはいかがであろうか。

一方、アマミノクロウサギのような希少種の標本はどうか。展示用の剥製はある程度の数がそろえばよいだろうが、研究用としては、骨格標本、毛皮の標本、内蔵の標本、さらに冷凍標本としていくらかでも保存したい。もちろんそのために絶滅に追いやってはいけけないので、生息状況を見ながらの慎重な作業になろう。もしかりに、どのように手だてを講じてもどんどん減って絶滅に向かうようであれば、ニホンオオカミ(ヤマイヌ)の標本が大英博物館に1匹しかないという愚を繰り返さないためにも、さらにそれ以前から資料を残す方策を立てておくべきである。

天然記念物級の昆虫について、九州大学名誉教授の平嶋博士はその近著「昆虫採集学」(1991)の中で、次のような提案をしておられる。すなわち、ある個体群から毎年1ないし2・3対の雌雄の成虫(産卵後のもの)を、委託を受けた機関が採集して、全国の研究機関、博物館に配布していく。仮に、この採集が個体群の存続に悪影響を与えることがあれば、その採集を一時中止すればよい。種類によっては、採集した雌雄を飼育して数を増やすことも可能である。

これはひとつの傾聴すべき具体案であると思う。これに対し、絶滅するものは静かに最後を看取ってやれ、という考え方もあるかも知れないが、それは人間の自然に対する知的な探求をもう止めようということで、別な意味で非常に大きな問題である。

なお、蛇足ながら、鹿児島県の自然を特徴づける多くの離島については、各島ごとに動植物、岩石など全種の収集をめざすべきで、これを何年かおきにチェックし、補充して行かなければならない。収蔵庫のスペースはとくにこのことを計算にいれておく必要がある。

収集の地理的範囲をどこまでにするか——中心は鹿児島県内におくとして、県外産でも国外産でも鹿児島の自然を理解するのに必要なものは積極的に集めたい。とくに、九州から南西諸島、さらに東南アジア、太平洋諸島の資料を優先させることになる。世界中からそれに関連する資料、あるいはいわゆる変古珍の資料を集めることも大事であるが、それらはチャンスを活かしてという程度でおかないと虻蜂とらずになる。もっとも、学芸員の専門的研究のための資料なら、それでも十分に活かすことが出来るから大いに進めることはいうまでもない。

どのようにして収集するか——地元や近隣地域の資料は館員による「採集」が最も手っとり早く、安価な方法であるが、館員が採集してから標本を作製し、資料として登録するまでは実に手間と時間がかかるもので、下手をすると学芸員の他の仕事を圧迫する。さらに、剥製や骨格標本など特殊の技術を要するものは館員の手に負えないので、外部の専門家に委託することになるが、館の

職員として標本作製の技術者を抱えることが出来れば問題は解決する。

「寄贈」は、館の方からお願いする場合と、ぜひ貰ってくれといわれる場合の両極がある。たいへいは両方の中間でめでたくことが運ぶが、前者は館の熱意と収蔵、保管および活用についての信頼が大事で、場合によっては購入に切り替えるべきものである。しかし、それは単に施設や金銭だけの問題でなく、信頼できる学芸員が常にそこにいるかという見通しがより重要な要因となる。後者すなわち寄贈の申し出については、資料の評価委員会のような組織で諾否を決めるという現在の県の寄贈手続きの方法でよい。一般には、無料で提供するのだからありがたく納めてもらって当然だとする考えもあるが、受け入れ側としては館の収蔵能力や資料の利用価値などを十分に検討して判断せざるを得ない。いったん受け入れれば、県民の財産として、かなりの維持予算を使って保管することになるので、ことは必ずしも簡単でない。

「寄託」についても似たような問題がある。所有権などをめぐって後でトラブルが起り易いので、出来れば寄贈か購入にしておく方がよい。

「購入」は最もよく行われる方法である。購入先は標本商か個人（コレクションの所有者）に大別される。前者についてはカタログがあるので、それによって世界各地の必要な標本を購入することが出来る。ただし、自然に関する標本類は当然なことながら、ごく限られた資料しか販売ルートに乗っていないし、近年は各国がこのような資料の国外流出を制限していく傾向にあるので、国外産については情報をよく把握して適切な手を打っておく必要がある。なお、とくに鹿児島に関係の深いアジア各地の昆虫、貝類などの標本は、海外渡航が盛んになってから、質量ともに貴重な資料が日本国内に入っているし、これらの地域に関する限り、採集のために館員を派遣するより、信用できる標本商で購入する方がはるかに安価でよい資料が手にはいることが多い。このような標本の売買は世界各国で行われており、あくどいものは別として、大いに活用したいものである。また、個人コレクションの購入は内容によるが、極めて有効な方法である。ただし、県内産については売りに出るような資料は少ないので、いろいろな方法を使ってこまめに収集せざるを得ない。欲しいコレクションは一般に高価で時に美術品並みの価格になるが、売りに出る自然資料は少なく、金さえあれば解決するものではない。

「交換」という方法は今後各地の博物館どうして盛んになるであろうが、そのためにはこちらの手持ち資料に余裕が必要なことはいうまでもない。

県内産は何が集まるか——これは易しいようで困難、大切なことでありながら、ついなおざりにされがちな問題である。資料ごとに検討したい。

脊椎動物からいくと、ほ乳類は県内産36種。シカ、サルなど有害鳥獣として時に防除の対象になるものや狩猟が許可されるものは入手し易いが、ネズミなどの小型種は専門とする学芸員がいないと困難である。鳥類は県内で記録されたものは320種。ほとんどが保護鳥になっているので、しかるべき機関の許可を得て全種の収集をめざすべきではあるが、捕獲困難なものが多い。また、移動力の強い動物群であるため、本県特産のものは少なく、広く県外、国外の個体を求めてもさしつかえないかも知れない。今のところ、県民から届けられる落鳥（事故にあって死んだ個体）を集めているが、種類が限られてくる傾向がある。は虫類（県内38種）、両生類（27種）はともに全種集め

られる。魚類は海の範囲をどこまでとるかによるが、淡水産と合わせて本県産は数百種になろうか。鹿児島湾でも315種が記録されている。淡水産の全種と海産のかかなりの所まで収集できるはずである。なお、円口類（1種、スナヤツメ）はすでに県内（米の津川）では絶滅している可能性があるらしい。

無脊椎動物には、おびただしい種類のある昆虫類が含まれている。また、微少なもの、展示用の標本作製が困難なもの、同定（種名を調べること）が難しいものも多く、博物館の資料としては、かなりの選択が要求される。展示しやすいものから挙げると次の通りである。

昆虫類は世界の全動物の75%をしめ、約80万種が命名されているが、調査が進めば300万種に達すると推定される。日本産は現在2万9000種、今後の調査で10万種近くにはなるといわれる。鹿児島県産はまだ正確には計算できないが、1万5000種余りが知られ、今後の調査によって3倍を越えると思われる。したがって、チョウやトンボ、セミなど身近で良く調べられているものは一通りの種類が集められるが、変異や分布資料としての標本は不足しがちである。今後、未知のものを含む全グループの収集にさらに努力したい。

昆虫と共に愛好者の多い貝類は県内産3500種、いちおう全種の収集をめざすべきであろう。そのほか、クモ類（県内産300種）、多足類（50種以上）、甲殻類（エビ、カニ）、頭足類（イカ、タコ）、キョク皮動物（ウニ、ウミユリ）、腔腸動物（クラゲ、サンゴ）などがあり、できるだけ多くの種を集めるよう努めたい。また、土壌微生物や赤潮のプランクトンなども収集し、うまい展示法を工夫したいものである。

植物は、県内産の種子植物が約2500種、シダ植物420種があり、全種を目標に収集する。コケ植物については、現在館に鹿大名誉教授、新敏夫博士（故人）コレクションが、大学やご遺族のご好意で寄託されており、ある程度整理が済んだ段階で寄贈手続きがとられる予定になっている。菌類、藻類も多くを集めたいが、専門の学芸員が勤務している時に集中的に収集する方が無理がないかも知れない。

地学資料については大庭昇博士の優れた提示が「鹿児島県文化財調査報告書」第35集53-71頁（鹿児島県教育委員会・平成3年発行）に出ているのでそれに譲る。これは昭和43年に執筆されたというが、現在でもなんら変わることなく極めて適切なものである。現在のところ、鉱物については鹿大名誉教授、浦島幸世博士のコレクションの一部をご寄贈いただく予定である。岩石とともに、全県下から収集したいものである。化石についても、県内の各産地からの資料が収集できるよう努力したい。

なお、栽培植物・飼育動物および鉱業関係の資料は、試験場、鉱山などと連携をとりながら、ひととおりの資料は集めたい。動植物では、とくに新品種の母体になったもの、一時県内で盛んに栽培、飼育されたものなど重要な資料が少なくない。

この他、忘れてならないものに映像がある。これについても県内の自然状況をいくらかのポイントを決めて、5-10年おきくらいに映像化して保存する必要がある。海岸線の変化、樹林の変化、火山による地形の変化、耕作地の消失などの環境や生物群集からアマミノクロウサギの生態のようなものまで素材は多い。対象とする自然を熟知している人でなければ、作品にむだが多く、良い資

料にはなり得ない。そういう意味でこれは博物館の仕事である。

2次資料としての文献は、鹿児島県の自然に関する本や学術雑誌、学会誌、大学や試験場の研究報告書、同好会誌、県の出版物など、県内のみならず全国各地、そして外国人による記録まで、おびただしい論文や報告書が100年以上も前から出版されている。このことも本県の自然がいかに注目を浴びているかを証明しているが、それだけに関係文献を渉猟するのに大変な時間を要することになる。従って、こまめに拾いながらこれらを収集しておかねばならない。もちろん、今後は県立図書館や大学図書館、国会図書館、あるいは国外の資料でも、コンピュータネットワークで結ばれて、必要なときにすぐ利用できるシステムが出来て行くであろうが、どうしても博物館に置かなければならないものが大部分であることを強調しておきたい。よく、県立図書館に揃えればよいという意見を聞くが、図書館ではとても手に負えないほどの数の文献があることを知って欲しい。このほか博物館の来館者が使う文献、図鑑等まで含めると相当な数になる。専任の司書を必要とするゆえんである。

(2) 調査研究活動

現在の県立博物館に毎日のようにかかってくる電話での自然や科学についての問い合わせを見るまでもなく、博物館に研究者がいることは常識化している。それはそれで結構なことであるが、博物館作りの段階では、ややもすると展示だけが重視されて、このことが忘れられる傾向なきにしもあらずで、中には博物館職員はどんな仕事をしているのかとまじめに聞く人がいる。

結論からいうと、学芸員は自然についての情報を研究、整理し、人と自然との関わり方についてのデータをいかに提供するかを研究する。具体的には、まず基礎的事項として、鹿児島の自然は現在どうなっているかを調べ、どのような歴史を持って現在に至り、いかなる未来があるかを考究する。内容としては、大地の形成史、気候の変化、植物や動物相の変遷、これら環境と人との関わりなど極めて多岐にわたるもので、単に県内の素材に留まらず広く世界、宇宙に目を向けた研究が求められるものである。

そのようなことは大学でやればよいと言われるかも知れない。もちろんこれらは大学でも十分テーマになり得るし、実行されてもいる。しかし、このような自然史の問題および生物の系統分類学の分野は、大学よりむしろ博物館のようところがふさわしいという意見（私は賛成しかねるが）もあるほどで、大学があるからといって地元の自然史的研究は思ったほど進んでいない分野が少なくない。幸い、鹿児島大学には理学部に系統分類学の講座があるし、他の学部や大学でも地元の自然を大事にし、研究素材としている人は多いが、むしろそのような人たちから共同あるいは関連研究機関としての県立博物館の充実を望む声が高いのである。

もちろん、大学は教育と研究の場であり、博物館も社会教育と研究の施設である。この教育の分野についても近年、生涯学習への対応から大学も広く一般に解放されることが多くなったが、博物館はなんといっても展示という中心になる教育部門があるので、それについての理論、技術、方法の研究が重要な仕事になる。また、この分野については古くから欧米の博物館関係者の成果があるし、最近では日本の展示業者もかなり研究を進めているので、他の教育普及活動と共に、学校教育が作り出した技術の粋をはみ出して、多岐にわたる新技法の開拓が要求される。

(3) 教育普及活動

展示のほか、館内活動としての講演、講座、映写会、館外での自然観察会、調査会、天体観望会などの活動も重要であり、また、多彩な出版物、効率的な通信法による情報提供システムもこれを支えることになろう。これらの内には、「路傍300種に親しむ運動」のように、現在の館でこの11年間かなり精力的に取り組んできたものもあり、県民に自然を見つめてもらいながら、かつ、博物館の存在、重要性をアピールする意味でもかなり成果を挙げつつあると思う。従って、新館ではできることなら、屋外施設としてそのような事業ができるフィールドを持つことが望ましい。

それをふまえて、今後大事にしたいのは、県民の自主的なグループの育成、援助である。博物館友の会のほか、植物、野鳥、昆虫、地学、天文などの研究会や同好会への活動の場の提供、館員と共に調査研究する新しい県民グループの育成などがある。鹿児島県は科学への関心が低く、遅れているという人もいるが、それが見当違いであることは現状が良く証明している。ただ、全国的なものかと思うが、自然が大事だと叫ばれる割には、若い世代を中心に自然離れは急速に進行しており、学校教育と連携を取りながら適切な対応を急ぐ必要がある。

(4) 展 示

自然博物館の展示素材は、母集団としての自然の中から一部を切りとって見せるいわゆる標本、自然を写し替える映像・音声、および模造したレプリカなどで、展示場はこれらをうまくアレンジしたものである。そこではそのような部分的自然あるいは偽自然から本物の全体が見え、さらに発展的に思考が広がるような展示配列と適切な解説が必要になる。したがって、展示場はある程度の面積を要するが、ただやみくもに広ければよいというものでもない。大英博物館級のコレクションがあればともかく、とりあえずは1～3時間で一通り観覧できる程度でよいと思う。いわゆる博物館疲れというのをひどく感じない程度に、展示場はできるだけ1～2、3階程度におさえ、それ以上の階はよほどせまい敷地に建設せざるを得ない場合を除き避けた方が賢明である。もっとも、これからはハイビジョンなどの優れた映像資料が展示場に進出することが多くなろうが、それらをゆっくり座って見れる施設が必要であるし、また、じっくり資料を調べたいという人のためにはそれなりの施設を別に考えればよい。

このように展示はもっとも中心となる教育活動で、博物館そのものでもあるので詳細は項を改めて述べる。

3 展示テーマと内容

全体構成としては、最初に鹿児島県の自然をいくつかの要素に分けて、それぞれの時間的流れを追って概観し、つづく各論編は自然の空間的広がりとして地域別にまとめ、さらに生物、地学ともに系統分類の視点から種類の豊富さ、多様性を紹介する。そして、視野を、県内を起点に全国、世界へと広げ、最後は天文分野を配して宇宙の彼方へ思いをはせる、というストーリーはいかがだろうか。

[第1主題] 鹿児島県の自然環境

現在の地形、地質、気候、植生、動物相が形作るいろいろな自然環境がどのようにして形成され、その過程で人がいかなる役割を果たしたか。ここでは、古生物の進化はメインとせず、生物に

としての生息環境の変化という視点から、特に人と自然との関わりの部分にウェイトをおく。人類以前の変化としては、地殻変動と火山活動、あるいは珊瑚礁の島々の誕生など壮大なドラマがあり、考古学が明らかにした人が自然と深く関わり始めた時代の展示（人の暮らしと自然など）を経て、歴史時代では南九州における農業や水産業、鉱業の発達と自然環境との関係、新しいところでは1960年代以前の自然と急速に姿を変えた現時点での自然の比較が豊富な資料で提示できる。科学的事項としては、プレートテクトニクス、生態系、すみわけと競争、進化など多くの事項が小テーマとして扱える。

展示コーナーは、例えば、地形の変化（模型、人工衛星からの映像、コンピュータによるシミュレーションなど）、大地の変化（地質図と柱状図、火山活動と地震、珊瑚礁など）、気候の変化（鹿児島島の四季と自然、日長、気温、降水量、風、海流など）、植物相の変化（人類活動以前の植生、現存植生、帰化植物）、動物相の変化（植物相の変化にともなう動物相の変化、現在の動物相、帰化動物）などがあり、総合的にみた現在の自然環境（森林、草原、耕作地、人里、都市、河川、湖沼・湿地、砂浜、磯、海洋）でしめくくる。

【第2主題】 郷土の自然—地域の自然—

ここでは地域別の各論編として構成する。市町村単位のみまとめはそれぞれの資料館にまかせて、ここでは県内をいくつかの自然群に分ける。これらは現在の地形や生物群集から見れば中規模の生態系ともいえるものに、少し行政区分も加味して、大ざっぱにまとめることができよう。各コーナーは地形、地質、気候、生物相を主にして構成し、天然記念物などもここで取り上げられる。コーナー例としては次のようなものがある。

県本土：県北部（大口、吉松など）、霧島山、出水平野と紫尾山、川内川流域（蘭牟田池などを含む）、県本土中部の山地、鹿児島市（桜島を含む）、薩摩半島、大隅半島、高隈山、笠野原台地—志布志湾。

離島：三島、甌島列島、宇治群島、草垣島、種子島（馬毛島）、屋久島、トカラ列島（口永良部島を含めて各島）、喜界島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島：東シナ海、鹿児島湾、黒潮の海。できれば沖縄県の島々のコーナーも設けたい。

【第3主題】 鹿児島県の自然—この多様な世界—

本県の多様な自然を理解する手だてのひとつとして、本県に存在する鉱物、岩石、化石、および動植物をできるだけ多く展示したい。ただ、それぞれが標本による展示となるため、それらを単に陳列しただけでは、見る人にアピールする力が弱い。このような展示は、いわば最も原始的、あるいは基本的な展示形態で、スペースをとる割には非効率的で、多くの館で敬遠されているように見える。ある意味では、現在の自然史系博物館で最も展示、解説技術が遅れている分野であるかも知れない。たとえば、肉眼では点としか見えないような微少な昆虫の標本の場合、これらをいくら並べてみても無意味だという意見もある一方、そのようなものにもちゃんと名前がついており、その種特有の生活を営んでいることを知ってこそ自然への感動が生まれるという考え方もある。いずれにせよ、実物標本ならではの情報源としての迫力をいかに展示するか、今後の魅力ある研究課題で、それぞれのコーナーに小さなテーマをいくつか設定し、適切な機器の使用によって十分に活

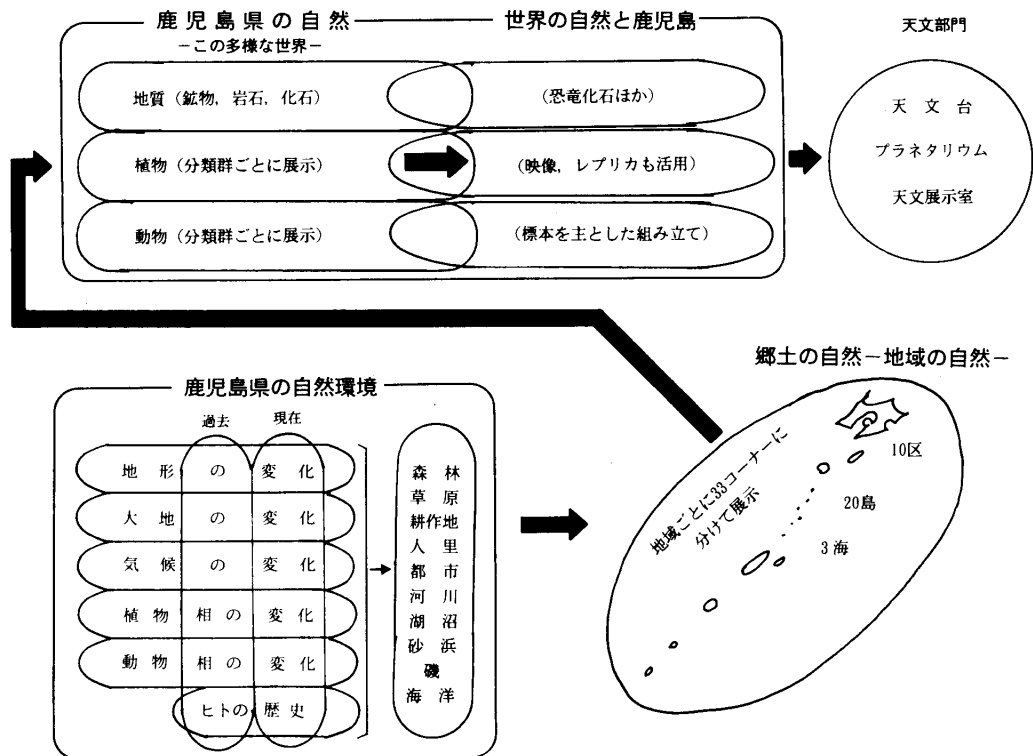


図1 展示テーマとその流れ

路が開けると思う。ここではひとつひとつの標本が、あるいは種というものが、いかなる意味を持つかなどの諸問題にも気を配りたい。

また、いわゆる天然もののほかに、飼育、栽培の生物がある。これらは時代の要請に応じて、古いものは消え、新しいものが急増しているが、この中から特に郷土に関係の深いものはぜひ展示したい。これも新しい自然博物館の素材として重要になってきた。

【第4主題】 世界の自然と鹿児島

現在の県立博物館には、恐竜の実物化石2体を含む小川勇吉コレクションを始め、若干の外国産の標本がある。このようなものが今後は人々の生活圏が地球各地に広がるにつれて増えてくるであろう。とくに、九州各県や南西諸島さらにアジア各地の資料は本県の自然と深くつながっているので、展示部門でも十分な面積を割り当てたい。中には、鹿児島県の自然とは直接のつながりのないものもあろうが、それらとの対比によって、本県の自然の姿がかえって鮮明になるような展示が可能であり、世界に目を開くという意味で貴重なスペースになる。特に、現在の恐竜化石展示室の資料は、新たに加わったボリビア産化石と共に、南北アメリカの化石としては得難い資料があるから、とりあえずこれを活かす手だてが必要である。

【第5主題】 天文台とプラネタリウム、天文展示室

現在、本県には天文台が2か所、プラネタリウムが4か所ある。しかし、両者を合わせ持つ施設はない。そこでこれらの中核施設として、常設の天文展示室の他、昼夜あるいは天候の如何にか

かわらず利用できるよう、天文台とプラネタリウムの2つを備えることが望ましい。

なお、以上の他、企画展示いわゆる特別展についての専用の部屋を作って存分に活用したいが、この他に展示を希望する者に提供するスペースも欲しい。また、資料を県内あるいは県外に貸し出す、あるいは巡回させる展示セットなどもこれからますます大切なものとなる。

4 施設の概要

これまで述べたような活動を展開するには、次のような施設が必要である。

(1) 博物館本館

資料収集・保管部門

動物収蔵庫（4種）：脊椎動物などの剥製、骨格：貝類、さんご：昆虫：各種液浸標本

植物収蔵庫（2種）：高等植物のさく葉、こけ類、菌類、海草：各種液浸標本

地学収蔵庫（3種）：鉱物：岩石：化石

標本一時保管庫、冷凍標本庫、荷受け場、荷物用エレベーター、動物標本作製場（大型動物の解体、煮沸、固体など）、動物標本作製室（剥製、骨格標本）真空冷凍乾燥器室、昆虫標本作製室、植物標本作製室、石工室、岩石・化石標本作製室、標本薫蒸室、倉庫

調査研究部門

動物研究室、昆虫研究室、植物研究室、地学研究室、動物飼育室、昆虫飼育室、植物栽培室、恒温室、電子顕微鏡室、暗室、映像資料作製室、情報処理室、実験室、薬品庫、研究用図書・資料室、小会議室、外来者研究室、（天文研究室）

教育普及部門

講座室、映写室、実験室、準備室、外来者学習室、図書・文献室、多目的ホール（大小）、自主グループ室

展示部門

常設展示室（上述の1～4展示室）、企画展示室、展示準備室、休憩室

天文部門

天文台、準備室、倉庫；プラネタリウム、投影室、天文展示室、（天文研究室）

管理部門

館長室、副館長室、応接室、事務室、会議室、印刷室、書類保管庫、更衣室、湯沸かし室、養護室、作業員室、更衣室、監視室

共用部門、その他

廊下、便所、洗面所、機械室、エントランスホール、ロビー、受付・案内、売店、ロッカー、食堂など

各部分とも身障者への配慮が、十分になされることは申すまでもない。

一番の関心事である、面積についてはまだ十分に計算していない。とりあえず他の博物館の資料を示して、今後の検討の手がかりとしたい。

館名	建築面積(m ²)	延床面積(m ²)	備考
栃木県立博物館	5,843	11,160	歴史部門などを含む
千葉県立中央博物館	7,104	15,334	〃
大阪市立自然史博物館	4,394	7,066	
兵庫県立人と自然の博物館	6,580	18,208	平成4年10月オープン予定
鹿児島市科学館	330	11,130	
鹿児島県歴史資料センター黎明館	7,226	15,985	
鹿児島県立博物館(本館)	792	2,697	昭和2年建造
(新)鹿児島県立自然博物館	?	?	

(2) 周辺環境と屋外施設

自然博物館といっても、市街地にある都市型のものも可能である。もし、鹿児島市であれば、城山や桜島などの自然が近くにあるので、それほど周辺の自然環境に気を使わなくても良いかも知れない。もちろん、周辺部に思う存分活用できる自然があれば、それに越したことはない。両者で利用の仕方が違って来るし、長短あるが、ここでは後者について考えてみたい。

周辺環境として理想的なものは、例えば次のような多様な生物的自然が存在することである。

照葉樹林(伐採せずに放置する古い樹林部と年次的に伐採する再生林)、落葉樹林(クスギ林など)、針葉樹林(スギ林、マツ林)、低木林・荒地(ツツジ、グミなど。適宜人手を入れて維持する)、草原(火入れ、放牧、草刈などで維持する)、耕作地、(畑と水田)；水系としては、溪流、耕作地付近の小川と池、その周辺の湿地。地学からみた自然については、その立地のものを活用できるような地下施設を作りたい。

とくに、耕作地を入れたのは、今や、田や畑のようなものまで「博物館行き」の時代になったと思うからで、これらは1960年代の作付け形態をとるものを維持、展示したい。このような考え方は一見突飛なようであるが、例えば、千葉県立中央博物館では人工的に樹林などを造成、造林中であるし、東京には見本としての水田が存在するように、この内のいくらかはすでに実行されている。耕作地については、本県の奄美諸島から急速に水田が消失し、県本土の畑作地帯もビニールハウスと茶畑、飼料畑が優占している現実を見れば一笑に付すわけにいかない問題であろう。このほかに植物園を附属させたい。

関連施設：管理室、農具室、倉庫、車庫、休憩所、観察小屋、動物飼育施設、網室、温室、芝生、広場、駐車場など

以上の他、外来研究者宿泊所すなわち県内、県外、国外の研究希望者、数名程度が長期あるいは短期の宿泊が出来るものがぜひ欲しい。団体の研修については既に各種の研修センターなどがあるので、これらの施設と十分な連携をとって対応できると思う。

また、現在の県立図書館のように、奄美大島には奄美分館の設置を希望しておきたい。これは展示機能を少なくし、資料収集、研究機能を主としたものが望ましい。屋久島につくる場合も同様である。

5 人事構成一組織一

博物館がいわゆる博覧会場や観光施設と違うのは、施設が半永久的なものであるだけでなく、何回見ても飽きず、見る度に新しい発見ができる展示が工夫されており、直接、間接に情報を引き出す組織、設備が完備されていることといえよう。これはとりもなおさず資料、素材を十分に活かす学芸員がいるからで、博物館は人が造るといわれるゆえんである。しかし、どのような社会でも、人件費の有効な使い方は問題で、とくに必要最小限度が決めにくい文化施設では、とかく節減の対象にされることが多いようである。これまでの日本の博物館の職員数は欧米にくらべて著しく少ないといわれる。鹿児島県立の自然博物館では、それをどのような形態、団体に運営するにしても、一応実現可能な(？)、理想に近い最低線を検討してみることは大切である。

一口にいえば、これからの博物館は、県立の試験場や大学と同等あるいは以上の人数が必要とされる時代が到来するだろう。もちろんこれらとの間に人事の交流があってしかるべきである。課題としては、全体の組織をどうするかということと、職種及び人数がある。職種については、常勤職員と非常勤職員、あるいは学芸員(研究職)、教職員、行政職員、外部委託職員などの組み合わせが問題となろう。職員数については開館日数や勤務体制なども絡んでくるので、新館の姿がもう少し見えてきてから検討すればよい。本報ではとりあえず、必要と思われる職名と人数を次のように考えてみた。

館長(1)	副館長(学芸員1)	次長(事務1)	
総務課長(事務1)	庶務(事務3)	*非常勤(3)
学芸課長(学芸員1)	動物(学芸員=陸生2, 水生2, 昆虫2; 教員1)	*非常勤(1)
	植物(学芸員2; 教員1)	*非常勤(1)
	地学(学芸員=岩石・鉱物2, 古生物1; 教員1)	*非常勤(1)
	天文(学芸員2; 教員1)	*非常勤(1)
普及課長(教員1)	情報処理(1)	*非常勤(1)
	映像(1)	*非常勤(1)
	展示解説	*非常勤(10)
	工作・製作員(1)	*非常勤(1)
	文献司書(1)		
野外施設課長(1)	耕作(1)	*非常勤(3)
その他	運転手(1), 警備員, 機械室担当など		

*非常勤は場合によっては、臨時職員を含む。

各種委員会：博物館協議会など

博物館友の会：ぜひ作りたいものである。

ボランティア：大いに歓迎したが、日本ではまだその方法など試行錯誤の段階でもある。そのため担当職員が必要になろう。

付記：予算についてはあえて触れない。立地、規模、組織など不確定要素が多すぎて算出できないこともある。

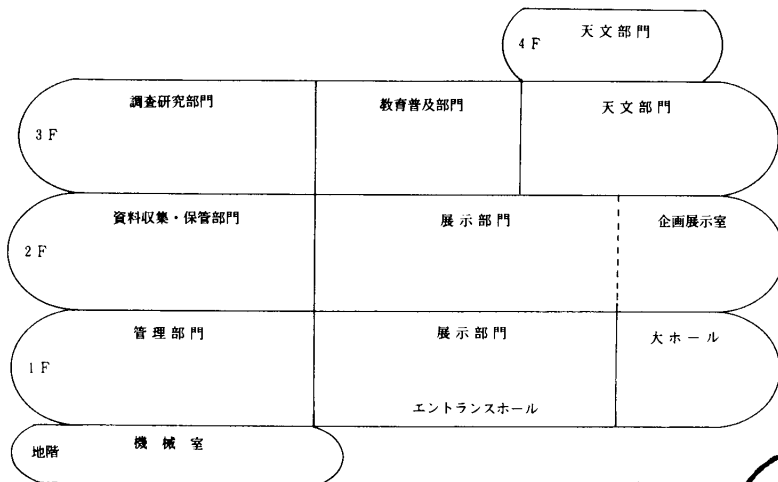


図2 本館の構成例

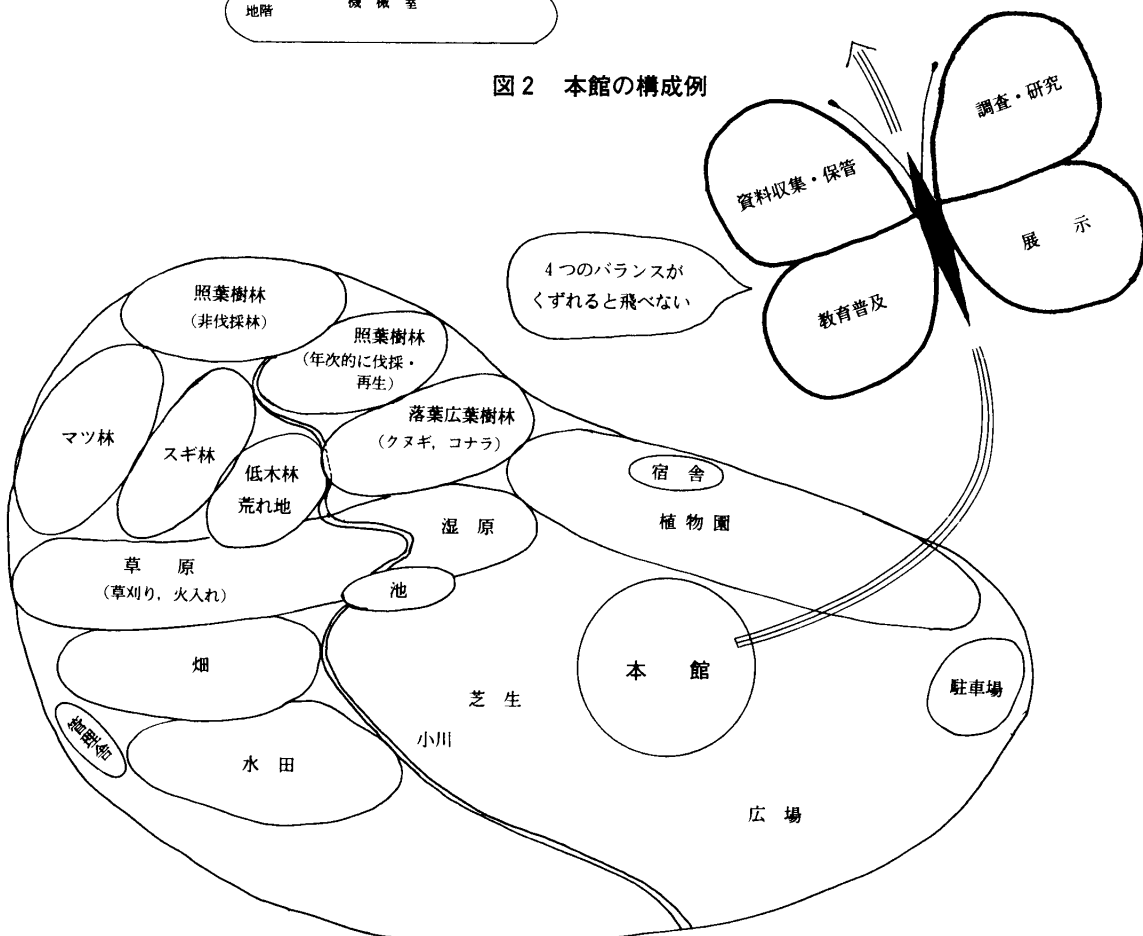


図3 周辺環境、野外施設の1例

これらの図を見て、こんなちっぽけなものと言われる方も、かように大げさなものと思われる方も、ぜひとも本文に目を通して筆者の真意をくみ取っていただき、きたんのないご批判をお願いしたい。